

茂木敏充衆議院議員との対談 第3回

全3回

衆議院議員 茂木敏充先生

開倫塾塾長 林明夫

林明夫：おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

この2週は、衆議院議員の茂木敏充先生をお招きして、「今後の日本をどうするか」というテーマでお話をおうかがいしてきました。3回目の今日は、「日本人の発想力を磨く」という内容でお話をさせていただきたいと思います。先生、よろしくお願ひ致します。

茂木敏充先生：よろしくお願ひします。いよいよ2学期が始まりましたね。

林：はい、そうですね。

さて、世界同時株安などで先進国全体の経済が混迷している中、中国をはじめとする新興国の台頭が目覚ましいと言われていています。また、日本の国際競争力が低下しているという話もよく聞きます。先生は以前金融担当大臣をお務めになられていましたが、専門的な立場からどのようにお考えでしょうか。

茂木：私は1980年代の前半にアメリカに留学していましたが、その頃は中国からの留学生はあまりいませんでした。当時は日本からの留学生が毎年増えている状態で、エズラ・ヴォーゲル教授が「Japan As No.1(ジャパン・アズ・ナンバー・ワン)」を著すなど、日本は非常に注目されていました。特に、自動車産業や電気製品の分野では日本が圧倒的にナンバーワンという状態でした。ところが、時代が進むと、エレクトロニクスの世界でマイクロソフトやグーグル、アップルなどが創業され、主役が完全に欧米に移ってきました。これは、日本の国際競争力が間違いなく低下しているあらわれであると思います。

林：「改善」に強く、「改革」に弱い日本とよく言われていますが、先生はこれについてはどのようにお考えでしょうか。

茂木：自動車とエレクトロニクス産業の違いに、そのことが典型的にあらわれていると思います。自動車は「改善」の製品です。ダイムラー・ベンツが自動車を発明してから今年でちょうど125年になりますが、自動車は当時から基本的には変わっていません。エンジンで車輪を回し、ハンドルやアクセル、ブレーキで制御するという基本構造は変わらず、そこにトヨタや日産、ホンダなどが「改善」を加えることで性能のよい車をつくってきたのです。

これに対し、エレクトロニクスは「革新」なのです。例えば、固定電話から携帯電話になり、それがスマートフォンになったように、全く異なる製品が出てきたのです。また、コンピュータの世界を見ても、80年代は大型のホストコンピュータの時代でした。それが90年代になるとパ

ソコンになり、2000年代になるとインターネットの世界になってきました。このように全く違った製品になるのがエレクトロニクスの特徴で、自動車との大きな違いです。そして、その変化をリードする新しい技術開発に携わるマイクロソフトやグーグル、アップルが世界で圧倒的なシェアを占めるようになったのです。

自動車とエレクトロニクスで比べてみると、日本はまだ自動車では国際競争力を保っています。これは「改善」に強いからですね。それに対し、エレクトロニクスで競争力を失っているのは「革新」に弱いあらわれであると思います。

林：では、「革新」、つまり最先端のエクセレントなものを作るのが苦手な日本は、これからどのようにしたらよいのでしょうか。この大きな課題について、先生のお考えをお聞かせ下さい。

茂木：これはなかなか難しい問題ですが、エレクトロニクスの世界でも「このようなものがあつたらいいな」という新しいニーズ、例えば電話を持ち運びたい、パソコンで会話をしたいなどの新しいニーズが、新技術や新製品を生み出していることに注目すべきだと思います。

では、実際に日本で求められているのは何かと言うと、今の日本が直面している一番大きな課題、ニーズは、前々回もお話した高齢化社会に関連したニーズであると思います。

日本は高齢化社会が非常に進んでいます。例えば、100歳以上の方は、40年前には日本全国で153人しかいませんでした。

林：そんなに少なかったのですか。

茂木：はい。それが今は47000人を超えています。また、平均寿命も、女性は86歳を超えています。つまり、今や日本は世界一の長寿大国・高齢化社会なのです。

ですから、これに関連したニーズは、医療の分野でも介護の分野でもたくさんあります。例えば、遠隔地でも高度な医療を受けることができる遠隔医療システム、不足している介護士さんの仕事の肩代わりをする介護ロボットなど、多くのニーズがあるのです。そして、これらの新しいニーズを技術や製品に置き換えていくところに「発想力」が試されるのではないかと私は思っています。

林：素晴らしいことですね。それは、最終的に組み合わせ技術で日本人の「発想力」を磨くということでしょうか。

茂木：おそらく一つの製品ということになると、ヒット製品が出るかどうかは必ずしもわからない部分があるわけですね。例えば、グーグルのように二人の天才が新しい検索技術を生み出すということはもちろんあっていいし、それも狙っていかなければなりません。

先程、車は日本がまだ国際競争力を持っている「改善」商品だとお話しましたが、今の車はカーナビを含めてエレクトロニクスの集大成でもあるわけです。何故そのようなことができるのかと言うと、日本人は今ある技術をいろいろ組み合わせ一つのものにしていくこと、車という空間で新しいものをつくっていくことが得意だからではないかと思えます。

つまり、日本人は、一個の革新的な技術を生み出すよりも、今ある技術やほんの少し先を行っている技術を上手く組み合わせることによって、新しいイノベーションを起こしていくことが得意だということです。

今後は、この組み合わせの能力をさらに拡大して「家庭全体」をエコ化していく、IT化していく、さらには「足利の街」をエコ化していく、IT化していくことに繋げていくとよいと思います。

最近では、スマートという言葉をよく使いますね。林さんも痩せてスマートになりましたね。日本語ではほっそりしていること、スリムのことをスマートと言いますが、英語ではスマートは「賢い」を意味します。電力の話のときにスマートメーターやスマートグリッドで賢く電力を使うというお話をしましたが、同じような形で賢い街をつくっていくとよいと思います。エコつまり環境に優しく、IT技術を駆使した街を「スマートシティ」と言いますが、このような街づくりを行っていけばよいのではないかと考えています。

まさに、「車」から「家庭」、そして「街」のスマート化、こういったところに日本の発想力を磨くチャレンジングな課題があるのではないかと思います。

林：「スマートシティ」ですか。素晴らしいですね。

「スマート・パワー」という本をジョセフ・ナイさんがお書きになりましたが、そのようなことに繋がるのでしょうかね。

茂木：そうですね。

林：ありがとうございました。今年もまた、衆議院議員の茂木敏充先生をお招きし、「今後の日本をどうするか」というテーマで3回に渡ってお話をおうかがい致しました。先生、どうもありがとうございました。

茂木：こちらこそ、ありがとうございました。

林：これから益々の御活躍をお祈り致します。

茂木：はい、ありがとうございます。